

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

ふたりの剣舞

小説 竹内けん

挿絵 B—RIVER

第一章：劍豪

006

第二章：邂逅

025

第三章：血煙

068

第四章：雷鳴

111

第五章：虜囚

149

第六章：逃亡

197

登場人物紹介

C h a r a c t e r s



イレーネ

剣聖とまで称される剣豪。黒髪美しい冷静沈着な女性。

ミリア

正義感の強い少女。姉弟子イレーネを深く尊敬している。

ヴラットヴェイン

伝説の魔術師。外見的には若い男だが、百年以上生きている。

グリンダ

ヴラットヴェインに心酔する女。

当初、雨のように冷たかったスライムが、イレエネの体温を受けて人肌に温かくなる。スライムがイレエネの体に保温効果を与えていた。

イレエネはオナニーさえほとんどしない。むしろ、健康な女体をしているのだから、性欲がないはずはないのだが、強固な意志の力で封じ込めていた。それでも我慢できないときは稽古をして気を紛らわせた。その努力の結果が、イレエネを女の身、しかもこの若さで剣聖といわれる存在に押しあげたのだ。

しかし、そんな潔癖なところが、今回ばかりは弱点となってしまった。

スライムは、そのねっとりとした肌触りで、イレエネの肌のすべてにぴったりと張りついていて。シワのひとつひとつ、襞のひとつひとつの間に残らず入って、その独特の蠕動を繰り返す。

「くッ、くくううう……ッ」

手に握り締めた剣の切っ先がガクガクと震え出した。それが間を置かず、イレエネの全身に波及した。

「おや、ずいぶんとスライムにかわいがられているようですね。しかし、さすがです。スライムにそれだけ体中をまさぐられながら、目に闘志をたたえ、剣を握り締めて立っているなんて。普通の女性にはできませんよ」

イレエネは必死で絶頂を噛み殺すが、スライムはまったく関係なく何事もなかったかの

ごとく、女体を廻り続けている。

剣の震え、腕の震え、肩の震え、合わせた膝の震えがどうしても止められず、ひたすら尿意に耐えている女のごときへつぴり腰になってしまっているイレエネに、ヴラットヴェインはゆつくりと歩み寄ると、その手に握り締める剣の柄をつかみ取った。

剣を奪い取られると同時に、イレエネの膝は崩れ落ちた、かに見えたが、直前に、イレエネの右足が飛び、ヴラットヴェインの後頭部を狙う。

とった。とイレエネは思った。いや、思いたかった。彼女の格闘技経験で、このタイミングで飛んだ蹴りをかわされた経験はなかった。

しかし、その会心の蹴りは、イレエネが思い描くほどのスピードも勢いもなかった。あっさりと、ヴラットヴェインの手によって止められた。

ヴラットヴェインは、その芸術的なまでに整ったイレエネの美脚を頭上に掲げると、その付け根を覗き込んだ。

「うんうん、よい眺めです」

濃紺のストッキングからガーターベルトの張りついた白い太腿、その奥には濃紺のショーツが見えた。

イレエネがこの旅にこの色のショーツを穿いて出たのは、汚れが目立たないようにというはなはだ実用的な理由であったが、白い肌の色とはまったく反対の色が、イレエネの素



肌をより艶やかに見せている。

「くっ」

股関節が柔らかいイレエネは、大股開き自体は苦痛ではないのだが、敵に股間を視姦されている精神的な苦痛、そして、この状態だと陰唇も開いてしまっているため、女にとって敏感なところにまでスライムに遠慮なく入り込まれてしまった。

体を駆け巡る形容しがたい感覚を前にガクガクと震えていた軸足を、ブラットヴェインは軽く払った。

「あん！」

まともな受け身もとれず、イレエネは無様に倒された。

「鋼をも斬り裂く剣術の使い手も、スライムは斬れませんでしたね」

柔和な微笑を浮かべながら、ブラットヴェインが覆い被さってきた。イレエネは抵抗したが、たちまちのうちに組み敷かれてしまった。

両手をつかまれた。手首の骨が軋んだ。ぎゅっと、上のほうにひねられた。骨がひび割れてしまいそうである。

「あっ！」

激痛にイレエネは、歯を食いしばり、顎を仰け反らせて耐える。

「あなたは大人しくしてくれればいいですよ。それだけでわたしが気持ちよくしてあげま

すからね」

「……」

歯を食いしばったまま、イレーネは魔術師の顔を鬼のような形相で睨みつけた。

ヴラットヴェインの口調こそ柔らかいが、それは強姦すると宣言したと同じである。必死に抵抗する女獅子を力ずくで押さえ込んだ魔術師は、唇を重ねてきた。

「ん……！」

イレーネの目が驚愕に見開かれる。その間に行われたヴラットヴェインのキスは執拗なものだった。唇全体を吸われ、縁を舐めまわされた。

また、イレーネの両手首を片手で押さえると、もう一方の手を下ろしてきて、キスをしたまま、胸当ての間から器用に小さい手を入れて、衣服の上から胸乳を揉みはじめた。

「ん、なにを！ やめ……」

イレーネは口を外して抗議するが、ヴラットヴェインが唇を押しつけているので、声はくぐもって言葉にならない。

ヴラットヴェインの力は強く、イレーネのあらゆる抵抗は虚しかった。かえって口を開いたばかりに、舌を強引に絡められ、口腔を舐めまわされ、唾液を吸われ、唾液を飲まれた。

剣の化身ともいわれた、敗北にも屈辱にも無縁な女である。その誇り高い女が、これほ

どに愚劣な手段で辱められ、卑しめられることに耐えられるはずがない。最悪の場合、自ら命を絶つかもしれない。

しかし、それでは意味がなかった。

男と女のことには、刃を交えるのとはまた違った法則がある。イレエネがヴラットヴェインにどんな感情を持っていたとしても、日毎夜毎に嬲られていては、別の感情が芽生えてくる。ヴラットヴェインに魅入られ、身も心もヴラットヴェインに捧げるようになるまで、たっぷりと情けをかけてやる。

そのためにも、最初が肝心だった。徹底的に犯しぬき、イレエネを屈服させる。

胸乳を丹念に揉みほぐされると、イレエネは口と口のあいだから熱い息を漏らしはじめていた。それが酸欠のためか、性的興奮のためかはイレエネにもわからない。

イレエネの場合、革の胸当てがブラジャーの代わりもしていたため、その下に手を入れれば、薄い布越しに乳首の位置まではつきりとわかる。

薄い長衣の胸元は揉みしわでヨレヨレになってしまった。

乳首の突端に指の平を当て、円を描くように転がした。乳首は敏感に反応し、服の上からでも十分そこが硬くなってしまっているのがわかるほどだ。

ヴラットヴェインの掌がイレエネの全身を這っていく。なめらかだが腹筋の弾力も感じられて、鍛えぬかれた体であることがわかる。

お尻のほうにも手が回り、尻肉が撫でまわされ、割れ目をもさすってくる。

ヴラットヴェインはパレオのなかにも手を入れ、太腿のしっとりとした感覚を楽しみ、そのまま上がって行って、ついには掌で股間をつかんだ。

「……！」

ヴラットヴェインの手は、当初、ショート越しにイレエネの女唇を優しく円を描くように撫でまわしていたが、やがて割れ目に沿って撫であげたり撫で下げたりを繰り返す、クリトリスや、小陰唇の溝などじっくりと責めている。

膝を開いて菱形状態になってしまったイレエネの両脚が虚しく痙攣する。

不意に、ヴラットヴェインは両手を離し、キスを終えて顔を上げた。

「だいぶ大人しくなりましたね」

いつしか全身で蠕動を繰り返していたスライムの存在が消えていた。おそらくヴラットヴェインが魔法で消去したのだろうが、だからといって、いまさらイレエネにどうこうできるものではなかった。

イレエネはあくまでも剣士である。剣に特化された武芸者にすぎない。剣を奪われては、もはや単なる女にすぎなかったのだ。

「はあッ……」

酸欠状態が解消されてイレエネは、大きく息を吸い込んだ。その間に、ヴラットヴェイ

ンは、パレオの裾をいつきにたくしあげた。

イレーネの下半身があらわとなる。太腿半ばまでの濃紺のガーターに包まれた美脚、そして、濃紺のショーツに包まれた股間。

ショーツは、ぐっしより濡れて張りつき、中央では女唇に食い込んでしまっている。むろん、雨と雨以外の水気のためである。

ヴラットヴェインは、ショーツの上から執拗に触ってきた。下着を通して恥骨のギリギリとした膨らみがわかる土手高である。

その間に、ヴラットヴェインの唇は、今度はイレーネの喉元に激しいネッキングを加え、脇の下に顔を突っ込み舐めまわし、また衣服の上から乳房にむしゃぶりつき、突起している乳首を咥えて吸いあげた。

薄い布越しに、ヴラットヴェインの責めはいやになるほど正確に、イレーネの急所を責めてくる。

「あ、くっ、く、うん、んー」

衣服越しに加えられる濃厚なペッティングの嵐に耐えようと努力するイレーネは、狂おしく悶えずにはいられなかった。

やがて下半身に移動した魔術師の唇は、白い肌に濃紺のガーターベルトが映える太腿にキスをし、そこから舌を這わせて、両腿の中央を飾る濃紺のショーツへと移動してきた。

そして、ショーツ越しに接吻したヴラットヴェインは、そこを執拗にペロペロと舐めまわし、チュウチュウと吸いあげた。

クロッチ部分にはつぶつぶの毛玉ができ、まるで愛撫によつてショーツに穴を開けようと欲しているかのようなだった。

この薄い布越しというのがポイントだったのかもしれない。性に不慣れなイレエネが、いきなり女の急所を執拗に觸られたなら、快感よりも先に苦痛を感じていたであろう。しかし、一枚の布越しのねちっこい愛撫には感じてしまっていた。

ヴラットヴェインは、ショーツをゆで卵の薄皮を剥ぐように剥きあげた。そして、ガーターベルトを引きちぎりながらいつきに引き下ろした。

そのとき雷光を浴びてヌメーッと糸引くものが光ったが、これはイレエネの体内から分泌された液体である。

イレエネの草叢は、つややかな直毛で構成されていたが、雨と愛液によつて濡れそぼっていた。

「くすくす、イレエネさん。取り澄ました顔とは違って、陰毛は濃いんですね。剛毛でボサボサ、もしかしてアヌスの周りまで生えているのじゃありませんか？」

「……」

「ああ、勘違いしないでください。素敵だと称えているんですよ。とっても牝らしい」

イレエネのまったく手入れされてない密林に手を突っ込んだヴラットヴェインは、しばしその感触を楽しむ。

「シャリシャリしてよい触り心地です」

ヘアーの上を撫でさすっていたヴラットヴェインの指が、やがて裂け目に入ってきた。

イレエネの陰唇からは、わずかにピンク色の花弁がはみ出している。不意に、ムッチリとした太腿を押し開き、大股開きにするや、そこを左右に広げられた。

ピカッ。

女唇がぱっくりと割れて外界にさらされたとき、再び雷光によつて、中身が浮かびあがつてしまった。

イレエネのなかはとつくに濡れそぼっている。かなりの蜜が溢れ、開かれた陰唇が、左右に糸を引くほどである。

薄暗い日差しと、ときおり光る雷を頼りに、ヴラットヴェインは、イレエネの秘部をじつくりと観察した。

奥には、さらに花弁に似た襞が入り組んで、膣口がある。

その少し上には、ポツンとした小さな尿道口があり、さらに上には小指の先ほどの包皮が出っばっており、その下からはミリアより小さな、ツヤツヤとした真珠のようなクリトリスが顔を覗かせていた。

その中心にヴラットヴェインは顔を埋めた。

「ああ……」

これで羞恥を覚えるな、というのは無理な相談である。

まして、相手は、中身はともかく外見的には、十代前半の無垢な少年の姿をしているのだ。二十二歳の自分が、少年に悪戯されているというのは、酷く倒錯した気分させられる。

イレエネは、本能的に、逞しい内腿でヴラットヴェインの顔を挟んでしまった。

魔術師は、かまわず恥毛の丘にギョツと鼻を押し当てて、柔らかい恥毛に鼻をくすぐられながらも、クンクンと鼻を鳴らして臭いを嗅ぎ出した。

甘ったるい汗の臭いや、残尿、そして愛液の臭いなどを、何度も深呼吸をして、鼻に擦りつけながらイレエネの性臭を心行くまで堪能している。

それから、割れ目に舌を伸ばしてきた。

柔らかくはみ出した部分の花弁を舐め、徐々に内部へと差し入れた。

狭間からもぐり込んだ舌先は、すぐにヌルリとした熱い柔肉に包まれた。そのままペロペロと犬のように舐める。

「はう！」

イレエネがビクンと股間を跳ねあげて喘いだ。

ヴラットヴェインは、かまわず、舌をクチュクチュとかきまわすように動かし、イレーネの蜜の味と、褻の感触を楽しんだ。

ヴラットヴェインの舌は、イレーネの内部をゆつくりとすべて舐めまわし、ついにはクリトリスに触れてきた。

「んーッ」

イレーネの下半身が、落雷でも食らったかのようにビクッと震えた。

ヴラットヴェインの舌先は、クリトリスを集中的に舐りはじめた。

「ん……、ん……、ん、ん……」

イレーネは下唇を噛み締めて、必死になって耐えているが、内腿と下腹部がガクガクと波打つことは止めることができない。

ヴラットヴェインは、両手で彼女の腰を抱え込み、上下する股間を決して逃がさず、執拗に舌を這わせ続けた。と、イレーネの痙攣が最高潮に達した。

「んっく、くく……」

狂おしくまるで水揚げされたばかりの魚が真っ白い腹を見せて跳ねているように、全身を跳ねさせる。イレーネは唇を噛み締めて、喘ぎ声を漏らさなかったが、クンニリングスで強制的にオルガスムスに達してしまったことは隠しようもない。

余韻にヒクヒクと痙攣しているイレーネを、ヴラットヴェインは強引に大股開きにして



しまった。そして、両手の指で切れ込みを広げると、指を蜜壺のなかにねじり込んだ。

「……うう……」

「おやおや、通じていますね。剣一筋に生きてきたかと思ったら、すっかり男を啜え込んだ経験があたりでしたか」

意外そうな声を出したヴラットヴェインは、さらにもう一本、花園に指を押し入れた。

「……ああ」

「しかし、そうそう経験豊富というわけでもないようですね。それにここしばらくご無沙汰だったようですね」

二本の指が、グリグリと膣口をかき混ぜる。

「……うっく」

「いや、違いますね。膜こそありませんが、これは未使用ですね」

激しい運動をする女の処女膜が破れて失われてしまうことは多々ある。

「くすくす、剣術の修練の途中で、処女膜も破ってしまうなんて、さすがに剣聖といわれる女性は違いますね」

ようやく納得いく結論に達したヴラットヴェインは指をズボリと引き抜き、呆れたと言いたげに鼻で溜息をついた。

「ミリアさんに続いて、あなたまで処女だったんですか。剣一筋に生きるというのは大変

ですね。あなたのような美女が二十二歳になっても、女の歓びを知らないなんて」

「……はあ、はあ、んっ、余計な、ああ、お世話よ……はう」

「まあ、そうおつしやらず、わたしが女の歓びを教えてあげますから、楽しんでください」
イレーネのヴァギナ観察を終えたヴラットヴェインは、ローブを翻して、なかからその
柔和な美少年の外見には相応しくない凶悪な逸物を取り出した。

その反り返った肉剣は、少年の臍にまで余裕で届いている。

雷光にヴラットヴェインの肉剣が浮きあがった。イレーネにとってそれは、山賊たちの
半月刀、忍者たちの奔放な武器、ラバンチオの聖光剣、ダイスト將軍の双槍、ミリアの魔
剣、グリンダの魔法、そしてヴラットヴェインの魔法と対峙したときよりも、畏怖と恐怖
を与えるものだった。

「……」

イレーネは後ろ手に這って逃げようとしたが、大股開きにされた太腿を押さえられてし
まっついて無理であった。

剥き出しとなった女の穴道に、男の突起が添えられる。

「くっ」

イレーネは菌嚙みをするが、いかんせん身体が言うことを聞かない。
スライムとヴラットヴェインの執拗すぎる愛撫によって、イレーネの体内はこれ以上な

いほどに、しとどに濡れていたため、挿入は意外にスムーズに行われた。

イレエネが二十二年間守り続けてきた貞操は無残に散った。

「はあああああ……！」

あまりの激痛に、広げた足を波打たせて震えたイレエネは逃げ出そうとするが、ヴラットヴェインの両手が、腰を押さえて許さず、かえって深く押し込んだ。

「うぐう……」

硬い肉の棒が女壺に侵入してきたことで、イレエネは息が止まりそうになった。

処女膜こそなく、破瓜の苦痛は思ったより小さかったが、はじめてずいどう隧道に異物を入れられるというのは違和感があり、苦しかった。

長い黒髪の手を咥え、眼をしつかり閉じ、まるで苦しみに耐えるようにヴラットヴェインの肉体を受け入れる。

「さすがに凄い膣圧ですね。それに皺が多い。ほお、これは名器ですね」

ヴラットヴェインは、根本までしっかりと入れると、イレエネの陰唇に蓋をするようにして、しばし動かず膣孔の動きを堪能する。

膣孔を締めあげるのもつまるところは筋肉である。肉体を剣聖といわれるまでに鍛えぬいているイレエネの膣孔が、締まるだろうということはだれにでも予測できることだったろう。

しかし、「名器」という膣内の構造というのは、天賦のものである。イレレーネは、剣士としての天稟^{てんびん}だけではなく、女としての天稟にも恵まれていたのである。

また、イレレーネには不本意だったろうが、膣の締まる女は、同時に感じやすくイキやすい体質である。

ヴラットヴェインは、イレレーネの両腕をバンザイさせる形で押さえつけ、腰に体重を乗せるようにして、恥骨で恥骨を押しつけて、ゆるやかな動きからはじめた。

決して暴力的な動きではない。ひたすらにゆっくりと、じっくりと、リズムカルに休みなく、女の孔を突貫し続ける。

ヴラットヴェインは、伊達に百年以上生きているわけではなく、女体の急所をよく把握していた。これを長時間続けられたら、女は否応なく、きわめて心地よい刺激として受け入れてしまう。

イレレーネは、それに本能的に気づいていた。戦いに敗れ、犯されるといっただけで恥辱であるのに、快楽まで感じてしまうなんて、戦士として、女としての沽券^{こけん}に関わる。

イレレーネは何度か、手首を握られてしまっている腕に力を込めてみた。剣士として鍛えられた腕はそれなりの力があるはずだ。しかし、少年の細腕にまったく歯が立たない。ピクともしないのだ。そうしている間にも、ソフトな振幅の前に、性器の粘膜がどうしようもなくとろけて愉悦を与えてくる。

破瓜の痛みが小さかったため、イレエネはじめてだというのに、快楽が襲ってきたのだ。

劍聖と呼ばれた女が、呵責に耐えぬ表情をする。

「……くっ……ん」

劍を振るうときの鬼気迫る表情からは、だれも想像できないだろう、艶っぽい表情をして俯き耐え忍ぶ。

「辛いですか。辛いでしょうね」

わざと優しげに尋ねてくる。ヴラットヴェインは上体を起こすと、自分が引き出るたびに卑猥にめくれ返ってしまう結合部をしげしげと鑑賞しながら運動を続けた。

見られていると気づいたイレエネが羞恥に震える。

「うううん」

イレエネの口から呻きが漏れ出す。

膣壁を押し広げて沈んでくる男のモノとは、こんなにも理性を狂わせるものだったのか。子宮まで疼くようだ。

イレエネは自分の体を偽っていたが、二十二歳の女盛りの身体が男を欲さないわけがなかった。心と体は別物である。たとえ憎悪の対象である男のモノでも、啜え込むこととなつた男根は、涙が出るほどに狂おしかった。

スライムによって全身を觸られた感覚とはまったく違う。硬い剛直によって貫かれることこそ、女体の欲するものであることが身に染みていた。

突き刺し、引き抜くたびに、タブタブと上下左右に踊るイレーネの重量感のある乳房を、ヴラットヴェインはそれぞれ両手でつかんだ。

腰の動きはゆっくりと休まず続けながら、モミモミと揉みしだく。さらに薄い布越しに、突起している乳首を、摘んだりひねったりねじったりする。

ボディスーツには、揉みシワができ、乳首の部分にいたっては、執拗に觸られすぎて穴が開いてしまいそうである。

襟をつかむと、驚異的な膂力で切り裂き、引き下ろした。

若々しい肩と、華奢な鎖骨、そして爆乳が外界にさらけ出される。

豊かな膨らみの頂を飾る乳首と乳輪は、美しい透明感のあるピンク色である。

もうすでに最大限に勃起している乳首に、ヴラットヴェインはむしゃぶりつき吸いあげた。

「あああ……ッ」

薄い布が一枚消えただけで、刺激とはこうも劇的に変わるものかと、驚愕してしまうほどの快感がイレーネの乳首から全身へと駆け抜けた。

ヴラットヴェインは、イレーネの胸元をしゃぶり尽くした。唾液によってヌラヌラと光

つてしまうほどに。

やがて片手が下に降りていった。狙いはクリトリスである。そこを円でも描くようにして撫でまわされたからたまらない。その電流のような感覚に、イレエネは絶叫せざるをえなかった。

「や、やめろーっ」

むろん、そんな悲鳴を聞いてもヴラットヴェインはその行為をやめはしない。指の腹でくりくりとこね回されたクリトリスは、包皮が完全にめくれ返ってしまっている。ぷりっ、と頭を出してしまった肉豆を執拗に撚られた。もちろん、その間も腰の動きはいささかも衰えず、ぐちゅぐちゅと淫靡な音を響かせながらイレエネの肉壺を抉っている。

彼女の痛々しい叫び声が野原に響き渡った。その声は苦痛からくるものなのか、それとも彼女の体になにか変化が起りつつあることの前兆なのか。

股間を襲う不可思議な快感。自分がなにを感じているのかどうかさえ、今のイレエネには判断できなくなりつつある。未体験の感覚に身体をさらされるということはそういうことだった。

彼女のような美女がヴラットヴェインのような美少年を誘惑し、童貞をいたでしうという構図はある意味珍しくもないのかもしれないが、イレエネのような美女がヴラットヴェインのような美少年に強姦され、処女を奪われながら、身も世もなく悶える構図は

奇観である。それだけ今の状況は奇妙な光景だった。

指が股間で蠢くたびに、イレエネはビクビクと震えるのを止められない。熱く火照った体が無意識のうちにぐねぐねとのたうった。

だが、体がこれほどまでに反応しながらも、イレエネはほとんど本能といっていい動きで、ずりずりと頭のほうへ頭のほうへと這いずり逃げていた。しかし、ここは野外の原っぱである。どこまで行っても終点があるはずがない。

幼きころより神童と呼ばれ、剣術の天稟を称えられてきた女性の自尊心が強くないわけがない。しかし、今は。

そのイレエネは、瞳に涙を浮かべながら小さく嗚咽を繰り返していた。

いつしかイレエネの急所責めに飽きたヴラットヴェインは、再びイレエネの両腕を押さえつけて、じつくりと出し入れさせた。

この魔術師には、百歳を越える老人としての老練な技巧と、十代の少年ならではの無限の精力が同居しているのだ。

剣の扱いには手馴れているイレエネだが、肉剣の扱いは丸っきりの素人である。

イレエネも剣聖といわれるまでに剣一筋に生きた傑物である。負ければこのように惨めに犯され殺される覚悟はできていた。

死ぬことは怖くない。死ぬ覚悟はできている。だから、敵対する者の命を躊躇なく奪っ

てきたのだ。しかし、快感に対する覚悟はできていなかったらしい。

男に抱かれても、ただ男が終わるのを待つだけだと思っていた。しかし、違うのだ。

体のなかに火花が散っている。こらえようと体を硬くして、目に力を込めて、ヴラットヴェインを睨みつける。

「なかなかお上手ですよ、腰の振り方が。とてもはじめてとは思えません」

「えっ！」

ヴラットヴェインに柔和に指摘されてイレエネの顔が硬直した。

腰が勝手に動いていたのだ。いつの間にか、男の腰使いに合わせて、女は尻を振っていたのだ。もちろん、意思とは無関係である。

イレエネは、意思の力で尻振りをやめようと努力した、そんなときである。ヴラットヴェインのほうが腰の動きをピタリと止めてしまった。

「……えっ！」

「おやおや、どうしました」

「くっ」

ヴラットヴェインに嘲笑されたイレエネは、奥歯を食いしばって腰の動きを止めようとした。しかし、絶頂を間近に控えた女体にとって、それは無茶な命令であった。イレエネは甘い砂糖菓子に勝る誘惑があることを、はじめて知った。

武器をちらつかせた山賊は、自分たちが有利に立ったと満足した。真相とは違うが、それを説明するだけの気力はイレエネになかった。

山賊たちの腰使いには、ヴラットヴェインのときに感じた女体の秘密を知り尽くしてしまっているといったテクニクは感じられなかった。ただ粗雑な荒っぽさだけの動きである。しかし、その動きが媚薬に侵されているイレエネの壺にはまった。ただひたすらに荒っぽく犯され、獣になりたかった。

乳房は、うつぶせとなっているため、より大きくなっており、肉棒に背後から突かれるたびに、白い塊がたっぷんたっぷんと揺れる。

「あーっ」

山賊たちは、一方的に果てると小さくなったペニスを引き抜く。そして、新たな山賊が、仲間の精液でドロドロになっていることにも気にせず、押し込んできた。

「あ、あ、……」

四肢をつき背後から獣のように犯されるイレエネは、辛そうに眉をひそめて耐えていたが、その表情の色っぽさに山賊たちはどよめいた。

前に、その冷血な一面を強烈に焼きつけているからだろうか、犯されているイレエネの表情の婀娜^{あだ}っぽさは際立っていた。

一方、ミリアもまた、イレエネと同じように、肉の野太刀によって、犯されていたのだ

が、様相は少し違った。

「え！」

いきなり奥まで挿入されたミリアは驚いたが、自分を貫いた野卑な男の顔を見てさらに驚いた。

「ああ、おまえらは!？」

「えへへへ、あねさん久しぶりです」

ミリアに気づかれたと知った山賊は、申し訳なさそうに頭をかいた。

「おまえら、こないだ、ボクの大事なところ見たろ。今度会ったらぶん殴るって決めてたんだからね、覚悟しろよ！　はう」

ミリアは勇んで拳を振りあげたが、山賊がミリアの小柄な体を抱えあげて、あぐらをかけた膝の上に乗せた衝撃で中断された。

「あのときは結構なものを見せていただきました。あねさんの綺麗なボボが目には焼きつきまして、あつしは十回以上お世話になりましたぜ」

「うー」

それは女として喜ばしいことなのか。ミリアは難しい顔で考え込んでしまった。

「あねさん、欲しいんですよ。女同士で虚しく舐めあってるより、こっちのほうが断然気持ちはいいと思いますぜ」

山賊がイブニングドレスをズルリと引き下ろすと、ミリアは下着をつけていないから、いきなりポロンと健康的な乳房がまろび出てしまった。

「くうー、さすがはあねさん、度量だけじゃなくておっぱいもでつかいんっスね」

感激した山賊は、豊満な乳房をふたつ手に取って、モミモミと揉み込んだ。

イレエネとミリアは、山賊に輪姦されているという一点では同じであつたが、その扱いには天と地ほどの違いがあつた。

イレエネのほうは情け容赦なく陵辱されているのに対して、ミリアを犯すときには、苦痛を与えないように最大限配慮する愛が感じられるのだ。

「どうです、あねさん」

「うん、いいよ。すごく気持ちいいよ……」

ミリアの言うようなまっとうな生活には戻れなかった山賊たちだが、ミリアへの恩義を完全に忘れたわけではない、ある意味では本気で惚れていた。ミリアが本気になつて抵抗するならば、やめるぐらいの覚悟はある。しかるに、ミリアが男根を欲しているならば、喜んで突っ込み、かき混ぜて、快感を与えてやる。

「くっ、あねさん、褻が多くて、やわやわと締まってきて、きついっス。こんなのはじめてっス」

「あ、ありがとう」

こんなときであるのに、褒められるとついお礼を言ってしまうミリアの素直さに、山賊たちの好意はますますつのる。

「あねさん、あつしらみんなあねさんに惚れてるッス。あつしらの頭になってください。あねさんのためなら、あつしらみんな火のなか水のなか、必死に尽くしますぜ。夜だつて必死にご奉仕しますから、決して欲求不満にはさせません」

「ダメだよ、ボクは悪いことは嫌いなんだ」

「あねさん、そんなに難しく考えることはないですぜ」

片手で弾力感のある乳房を揉みしだきながら、もう一方の手を下半身に持っていた。その武骨な指先で陰核を探り当てた。

クリトリスをクリクリクリクリと回されるのがもっとも感じるミリアは、あつという間にアクメに達してしまった。

「あう、……やめて、ボクそこ弱いんだよお」

「ダメです。あねさんがあつしらの頭になるって承知するまでここを責め続けます」

「ひいー……」

グリンダによって開発され尽くした体を持つミリアは、どうしようもなく敏感である。包皮から自然と顔を覗かせた大粒の真珠を執拗に觸れながら、突きあげられたらたまらない。

一方で、後背位で犯されているイレエネの陵辱は悲惨を極めていた。ミリアに与えられるような優しさは、いっさいなく、ただ征服欲を剥き出しにした荒っぽい腰使いにさらされているのだ。

今は亡き頭目への復讐心で、この鼻っ柱の強い冷血女を徹底的に犯しぬいてやろうと決意している。その意味で、この後背位というのは、男の征服欲を満足させる形であったのだろう。

また、ミリアにあるかわいげというものがイレエネには徹底的になかったため、山賊たちをより攻撃的にさせていた。

山賊たちに通り犯されたイレエネは、完全に腰が抜けてしまい、力なく前方に突っ歩していたが、寸毫の休息さえも許されず、体を強引に抱き起こされ、仰向けになる男のペニスの上に連れていかれた。

山賊のひとりがイレエネを大股開きにして両膝の裏を持って抱えあげた。しかし、ヴァギナからペニスは抜かない高さで止めると、グチュツツ……、ズツ、グニユー、ズチュ、クチュクチュと、女陰を広げるようにゆつくりと円を描くように回したのだ。

「ああ……」

この視覚的な演出は、凄まじかった。陰唇からはとめどなく愛液と精液が交じりあったものが溢れ、陰茎を伝い下りていくのだ。

そのあまりにも卑猥な光景を見下ろしたイレエネは目を剥き、ミリアは絶句し、山賊どもは生唾を飲んだ。

下になっていた男が、腕を伸ばし陰核を摘むと、クリクリと揉み込んだ。

「ああ……ああ……あああああつ」

「いいかげん腕が疲れたぜ。ほら、自分で腰を振りな」

不意に背後から抱えていた男が手を離れた。当然、イレエネは先っぽを咥えている陰茎に沿って、ドスンッと腰を落とす。

「あつ、あ……、ん……んふ、あつ！ はあ……あ……」

肉棒が膣口から脳天まで突き抜けたような感覚にイレエネは、目を見開き、体はヒクヒクと痙攣した。その瞬間、頭のなかでなにかが切れた。

騎乗位となったイレエネは、なにかに憑かれたように積極的に腰を使い、イキっぱなしの状態に入ったのか、大きなうねりに身を任せはじめた。

この腰使いの荒さには、犯していた山賊たちのほうがタジタジとなる。

男の鼠蹊部を碎かんと欲しているかのように、パチンパチンと体重をかけて、上下運動が繰り返された。

「あああ、イっちゃう、イっちゃう、またイっちゃう……」

焦点の合わない黒目を空に向けたイレエネの白く美しい肌に黒髪がまとわりつき、夏の

日差しが注ぎ、美乳が踊り、飛び散った汗が宝石のようにキラキラと輝いている。

「くうー、気取ってる女ほど、セックスのときはすげえとは聞いていたが、これほどとはな」

イレエネの乱れっぷりは、周りで順番待ちをしている山賊たちにとって、生唾ものの痴態である。

「これを握れよ」

「おれのも頼むわ」

イレエネは両手にそれぞれ肉棒を握らされ、さするはめになった。

反り返って絶頂を迎えるイレエネの体内で、山賊は思いっきり精を放った。

「ほら、このスキモノの淫乱ねえちゃん。たっぷり食らわしてやるぜ！」

スキモノ、淫乱、どちらも本来のイレエネとはかけ離れた呼称である。しかし、今のイレエネを前にしては、だれも否定できないだろう。もちろん、イレエネにも。

（これは、薬のせい、薬のせいなんだわ。だから、止まらないの。腰の動きが、おまたの疼きが……止まらないの）

イレエネは必死に自分を騙しながら、ペニスを食った。

その恍惚とした表情に刺激された、イレエネにさすられていた男どものペニスからも、大量の精液が迸り、イレエネの全身に熱い精液を浴びせた。

そして、それらとは違う、薄黄色の液体が宙を舞った。

「おお、すごい、見たか、この女、潮吹いたぜ」

「ああ見た。ビューって飛んだな。おれはじめて見たぜ、潮吹く女。淫乱女は潮吹くって噂には聞いてたけど、本当だったんだな」

「うく……」

山賊どものあからさまな論評に、イレエネは赤面した。

これはヴラットヴェインが、イレエネの体に刻み込んだ性癖であろう。イレエネは絶頂を極めると潮吹きを行う女体となってしまうていたのだ。

そして、イレエネの潮吹きが、山賊たちの性欲にさらなる火をつけてしまった。

「おらおら、もう一回吹いてみせろよ。この潮吹き女」

「ああ……そんな」

剣舞の君、月の剣姫、剣の舞姫など、さまざまに呼称される剣聖イレエネに、新たに潮吹き女という呼称ができたようである。

あまりに破廉恥な呼ばれように、イレエネは屈辱に涙するが、事実であるからどうしようもない。

「おら、潮吹き女、こっちにも入れてやるぜ」

不意に背後から腰をつかまれたと思ったら、アナルに突っ込まれた。

「あ……、あ、あう」

「おお、潮吹き女、すげえな、あんた。澄ました顔してバッチリアナルまで調教済みじゃねえか」

「……」

ミリアの使用した擬似男根に比べれば、本物の男根は小さかったので、イレエネのアナルは、無理なく呑み込んでしまったのだ。だからといって、アナルに異物を入れられる違和感と苦痛に慣れたわけではない。

全身からジワーと冷たい汗が吹き出て、体力が奪われる。

「んじゃ、おれは口でしてもらおうか」

イレエネの口内をまるで、膣と勘違いしているかのように、喉奥まで突っ込まれた。そして、喉奥で射精されたイレエネは、息が詰まり、やむをえず嘔下した。

「おつ、この女、また潮吹いたぜ。すげえ、あつたけえ液体が玉袋にジワーツとかかって、まるで玉だけ風呂に浸かってるみてえだ。玉がふやけちまう」

山賊は恍惚とした表情をする。

「そんなにいいのか。おれにもやらせろよ。おらおら潮吹けや」

新たにイレエネの膣に入った山賊は、太腿を抱えあげると、子宮口をガツガツと突貫して、突き破ろうとするかのような暴力的な動きで、女体を蹂躪した。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>